

目 次

1	発刊にあたって	1
2	入賞者一覧	2
3	作文コンクール (要項・応募状況・審査内容)	3
4	受賞作文	4
	富山県知事賞 黒部市立鷹施中学校 能登 夕剣 ...	4
	北方領土問題対策協会理事長賞 黒部市立高志野中学校 島端 汐里 ...	5
	北方領土返還要求運動富山県民会議会長賞 入善町立入善西中学校 塚田 直樹 ...	6
	富山県教育委員会教育長賞 富山市立芝園中学校 西川 実玖 ...	7
	富山県市長会会長賞 射水市立新湊南部中学校 高瀬 伊音 ...	8
	富山県「北方領土問題」教育者会議会長賞 射水市立大門中学校 古野 卓矢 ...	9
	入選 黒部市立字奈月中学校 佐賀 美紀 ...	10
	入選 黒部市立字奈月中学校 長谷川宇蘭 ...	12
	入選 黒部市立鷹施中学校 横山さくら ...	13
	入選 黒部市立高志野中学校 米田 紘子 ...	14
	入選 黒部市立桜井中学校 河路 咲希 ...	15
	入選 黒部市立桜井中学校 堀川 桃子 ...	16
	入選 魚津市立西部中学校 芦崎 美友 ...	17
	入選 富山市立西部中学校 林 優月 ...	18
	入選 射水市立大門中学校 田中 信也 ...	19
	入選 射水市立新湊南部中学校 増谷 茉由 ...	21
	入選 砺波市立庄西中学校 埴山 弥京 ...	22

(巻末) 参考資料

発刊にあたって

北方領土は、私たち富山県民にとって先人が開拓した大切な領土であり、本県に六百人以上おおいでになる元島民の方々にとつてはかけがえのない故郷です。しかし、戦後六十六年が経過した今日においても、依然としてロシアによる不法占拠が続けられています。

「私たちと北方領土」作文コンクールは、中学生を対象に、北方領土という日本の領土でありながら、日本人が自由往来できない地域があるという現実を正しく理解し、関心呼び起こすことを目的に実施したもので、今回で五回目となります。

県内全域の中学生から過去最多となる千編の応募をいただき、北方領土の歴史や富山県とのかかわり、国際情勢を分析しながら現在の交流の状況などを自分で調べ、興味と関心をもって学習している生徒が多いことに驚きました。この作文集は、そのうち十七編の入賞作品を掲載しておりますが、いずれも大変すばらしい作品であり、北方領土問題に正面から向き合って考えたこと、問題の解決には国民の粘り強い取組みが必要なこと、ロシア人との相互理解が必要であることなどが訴えられています。また、残念ながら、あと一步で入選を逃された作品の中にも、きらりと光るすばらしい作品が数多くありました。

これらの多くの作品から、北方領土問題解決の希望を担う次世代の皆さんが育っていることがうかがわれ、喜びにたえません。また、こうした学習を通し、生徒が国際的な場でも活躍できる力を身に付けてくれるものと期待しております。

この作文コンクールを通して、北方領土問題の正しい理解とその返還運動について、自らの考えをもち、文章に表現することは、それぞれの学校における北方領土についての授業のあり方とその内容が大きくかわってくるということを改めて実感しました。私ども県民会議と教育者会議では、北方領土に関する教育用DVDを県内全ての中学校に配布し、授業を進める上で有用な教材として活用いただくよう取り組んでおり、引き続き、北方領土教育の一層の充実に努めていきたいと考えております。

おわりに、この作文コンクールにご協力いただきました多くの皆様方に改めて厚くお礼申し上げます、発刊の言葉といたします。

平成二十四年三月

北方領土返還要求運動富山県民会議

会長 坂田 光文

富山県「北方領土問題」教育者会議

会長 村田 博史

「返せ！北方領土」

黒部市立鷹施中学校 三年 能登 夕剣

北方領土の返還、これは元島民の方々、日本国民である僕たちの願いです。北方領土派遣事業や北方領土出前講座など、「北方領土問題」と関わる機会が多くありました。その体験の中でも印象深かったのは、北方領土派遣事業です。

八月、北海道根室市へ富山県代表として行ってきました。地元の中学生との意見交換や北方領土資料館の見学を通して、北方領土に対する関心・理解がいつそう高まりました。派遣事業中に初めて知り、驚いたことがあります。それは富山県に住む元島民の数が、北海道に次いで多いということです。遠く感じていた北方領土が急に身近に感じられました。同時に、自分たちが北方領土問題に無関心でいてはいけないと思いました。

派遣事業中に納沙布岬を訪問しました。

まず目についたのは「四島のかげ橋」というモニュメントです。その立派な佇まいからは「北方領土が返還されま

すように」という強い願いを感じました。

納沙布岬から齒舞群島の貝殻島までは三・七kmしか離れておらず、晴れている日には見ることもできるそうです。あいにく、見ることはできませんでした。しかし、ガイドの方の話を聞いたり、霧の彼方にある北方領土を眺めたりしているうちに、日本の領土であり、こんなにも近くにある北方領土に行くことができないのはもどかしいという、元島民の方の思いはよく理解できました。

この派遣事業の目玉は「北方領土返還要求根室市民大会」に参加することでした。大会会場には予想以上に大勢の人がいて、北方領土問題に対する真剣な取り組み姿勢が伝わってきました。何より心に残ったのは、大会の最後を飾った「北方領土を返せ！」というシュプレヒコールです。望郷の念を語った元島民の方も、返還要求に向けての意欲を語った政治家も、北方領土への熱い思いを語った地元根室の方も、全員が一心に北方領土返還を求め、声を一つに叫んでいました。この熱い思い、願いが叶う日が待ち遠しいです。

北方領土問題。解決への道は長く、険しいものだと思います。しかし、僕はこの問題は解決しなければならぬと思うのです。

僕達には「故郷」があります。生まれ育ち、思い出がたくさん詰まった大切な場所。北方領土は日本の領土であり、元島民の方々にとってかけがえのない故郷なのです。元島民の方々の話に、「故郷を返してほしい」「もう一度故郷へ帰ってみたい」という言葉が出てきたことをよく覚えています。

北方領土問題は、日本人が心に刻みこんでおかなければならない問題です。一人一人がこの問題について知り、一致団結して返還要求運動に取り組むことで、問題解決への道が開かれるのです。僕達の合言葉は、

「返せ！北方領土。」

「北方領土返還」を目指して

黒部市立高志野中学校 三年 島端 汐里

小学生の頃、私の通学路にはいつも北方領土の返還を求める大きな柱が立っていました。私は時々それを見て、「北方領土って何だろう。日本の島ならすぐに返してもらえばいいのに」と思っていました。学年が上がるにつれて

私も北方領土についての知識が増え、前よりも返還してほしいという思いが強くなりました。

先日、私は総合的な学習の時間に、北方領土の元島民や二世の方々にお話を聞く機会がありました。その話の中で講師の方々に共通して言えることは、やはり「北方領土返還」という強い思いです。しかし、思うだけでは返還が実現しないというのが現実です。

そこで、私は少しでも北方領土返還というゴールに近づくために、どうしたら良いのかということを考えてみました。

まず、一つ目は自分自身が北方領土について知ることです。どんなことであっても「ただ返して欲しい」という結論だけでは説得力がありません。北方領土のことを多く知り、それを他の人にも伝えていくことが大切だと思います。

もう一つは、日本とロシアが互いに理解し合うということです。もし、北方四島全てが日本に返還されたとしたら、そこに住んでいたロシア人はどうなるでしょう。今まで住んでいた場所から突然「出て行け」と言われれば誰だって困ります。だからこそ、少しずつ話を進めながら、相手のことも考える必要があります。

そう考えると北方領土返還というものは簡単そうで、実はなかなか実現することが難しいものだと思えてきました。北方領土は日本人にとつての故郷でもあるしロシア人にとつての故郷でもあります。互いになくってはならないこの土地はいつたれどちらのものなのでしょう。

現在日本人はロシアが不法占拠しているため北方四島へ訪れることはできません。そんな遠い存在になってしまった北方領土を今よりもっと近い存在にするのが、今を生きていく私たちの役目です。だからこそ、私たちは以前北方領土に住んでいた方々からの意思を受け継いでいかなければなりません。そして近い将来、日本人みんなが自由に北方領土に行けるようになればいいと思います。

北方領土問題について思うこと

入善町立入善西中学校 二年 塚田 直樹

「生活は苦しかったが島はよかった。」

と、北方領土に住んでいた方が言ったのを僕はDVDを見て、聞きました。今まで北方領土の事は、深く考えた事は

一度もなかったけれど、あの言葉を聞いて、少しずつ北方領土に対する意識がでてきました。

今までは、戦争で負けたことよって占拠されているのだから何故そんなに返還してほしいと言っているのかよく分かりませんでした。しかし、サンフランシスコ条約が結ばれ、日本はウルップ島より北の島だけを放棄した事を知り、北方領土はロシアに渡してはいないという事が分かりました。ロシアが勝手に島へと入り、略奪などをしていたと聞くとそんな事は絶対にやめてほしいと思いました。北方領土は日本の領土ということをもまずは知る事が必要だと思えます。

北方領土の住民と富山県民には強いつながりがあります。多くの方が水島などの島々へ行き、出稼ぎに行ったりしていました。住民のほとんどは、子供も一緒に昆布の漁業をしていました。江戸時代には富山県が昆布ロードと呼ばれる西廻り航路の中継地としても発展していて、僕が住んでいる入善町の芦崎地区からも出稼ぎに行っていたそうです。このように北方領土と深くかかわりをもっている、富山県民が先陣をきって北方領土問題にたずさわるべきだと思えます。

それから北方領土問題解決に向けて今までどのような事

が行われてきたのか関心をもつようになりました。今まで行われてきた活動には、日本とロシアの間でのビザなし訪問や交流事業があります。もつと多くの活動を行い、日本もロシアも互いの事をよく知り、北方領土への正しい知識と理解を得たうえで、返還運動に取り組みようになればいいと思います。

自分の故郷を奪われるという事は、とてもつらく悲しい事だと思えます。そのつらく悲しい思いをしておられる方々が身近におられると思うと自分までも同じ気持ちになり、返還してほしいという気持ちが強くなります。その気持ちを大切に、同世代の人は勿論、次世代の人へも伝えていきたいです。

そして、一日でも早く北方領土返還の実現をし、「生活は苦しかったが島はよかった。」から「生活は変わらないけど、やっぱり島はいい。」という言葉に変わってほしいです。



北方領土返還を願って

富山市立芝園中学校 二年 西川 実玖

政権交代後、よく耳にする「我が国固有の領土」という言葉。最近の尖閣諸島の問題があつてから、私も含め、領土について考えるようになった人は少なくないと思えます。

日本とロシアの間で未だに解決されていない北方領土の問題、根室半島に連なる歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島、これらの土地は日本人によつて開拓され、日本人が住み続けた島々です。戦後、ソ連軍に不法占拠され、日本人が島から追い出された行為は許せません。住む権利を奪われた人々はどんな気持ちでその土地を去つたのかと思うと心が痛むとともに、怒りがこみ上げてきます。北方四島は歴史的にみても、一度も外国の領土になつたことのない、我が国固有の領土です。それなのになぜ、領土問題が起こつてしまふのでしょうか。

北方領土は、豊富な水産資源や森林資源のある、自然に恵まれた土地です。その土地の資源を得て、国の権威を高

めたいという欲望が領土問題へとつながっていくと思いません。

私は日本が抱える領土問題について興味のない人が多いと思います。しかし、日本固有の領土を他国に占拠されている事実を他人事にしていいのでしょうか。

日本全国のみならず、北方領土からの引揚者が北海道に次いで多い富山県でも、北方領土返還に向けた取り組みとして、啓発や署名運動、北方四島との交流を行っています。

しかし、これらの活動も大切ですが、北方領土問題解決のためには、国民一人一人の意識を変える必要があります。北方領土への関心が薄い、若い世代の人たちが、領土問題に興味をもち、返還に向けた活動を活性化させるべきです。そして、私たちの声が政府に届き、交渉の後押しになればいいと思います。日本政府は、政治的な交渉を粘り強く続けていくのと、「北方領土は日本固有の領土」であることを自信をもって、ロシアだけでなく、世界各国に主張してほしいです。

今もなお、北方領土の元島民は、故郷のことを思い、北方領土返還を願っています。私たちは、そのような人がいるということや、この領土問題は誰かが解決してくれるだ

ろうという他力本願な考えでは解決しない問題であることを忘れてはいけません。国民一人一人が今、自分に何ができるかと考えなければなりません。最終的には、領土問題が解決し、日露間で友好な関係が築かれ、北方領土でまた日本人が暮らせる日がくることを私は心から願っています。

北方領土とは

射水市立新湊南部中学校 一年 高瀬 伊音

僕は、今まで北方領土に全然関心をもたなかったし、興味をもって調べようとしたこともありませんでした。小学校のときに、授業で習いましたが、それでもあまり興味をもちませんでした。

中学の授業で、改めて北方領土について学び、小さな島の問題だけでも、とても大切な問題なんだと分かりました。いろいろ調べてみると、ソ連軍は、北方四島に住んでいた日本人たちに、とてもひどいことをしたようです。昭和二十六年に結ばれたサンフランシスコ平和条約では、

千島列島を放棄しましたが、北方四島はその中には含まれていませんでした。その条約があるにもかかわらず、北方四島を占領するのは疑問に思います。確かに、ロシアは収入資源が少ないので、北方領土を手放したくないのかもしれないですが、それでも一方的に占領したり、ただ住んでいただけの日本人たちにひどいことをしたりするのはよくないことだと強く思いました。ましてや「日本は戦争に負けたから当たりまえ」という考え方は、絶対にやめてほしいです。北方四島はもともと日本の領土なのです。

ロシアとの間で、北方領土問題が解決したら、外交や貿易などが今以上にさかんになって、日本とロシア両国の友好関係も深まると思います。

僕の母は、ロシアが母国です。母と北方領土のことを話し合ったことがあります。母は、「早くこの問題が解決してロシアと日本がもっと友好的な関係になればうれしいな。」と、言っていました。僕が初めてロシアへ行ったとき、「ロシアの人たちは、とても親切でよい人たちだな」と思ったのが第一印象でした。そんなロシアと領土問題を早く解決してほしいと僕も思いました。僕が生まれた日本と母の母国ロシアとの友好関係を深めるためにも、今の自分ができることは何かをこの機会に考え、北方領土問題にかか

わり、早く解決できたらよいと思いました。

僕は、将来、母の国ロシアと日本との架け橋となり、領土問題を解決し、両国の交流を深められるような仕事に携われたらと考えているところです。

二月七日

射水市立大門中学校 三年 古野 卓矢

二月七日。この日は何の日か知っているだろうか？「北方領土の日」である。北方領土に対する国民の関心と理解を深め、北方領土返還要求運動の盛り上げを図るためにこの日がつくられた。

北方領土問題とは、北海道本島の北東洋上に連なる島々、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島がロシアによって占拠されているという問題である。一九四五年八月の第二次世界大戦終了直後、ソ連軍により、不法に占拠され、日本人の住めない島々になってしまふ。北方四島は歴史的にみても、一度も外国の領土になつたことがない。ということとは、我が国固有の領土であり、また、国際的諸取決めからみて

も、我が国に帰属すべき領土であることは疑う余地もないだろう。現在でも北方領土はロシアに不法占拠されている。こういった状況が六十年以上経過した今も、続いて、日本は我が国固有の領土である北方領土の返還を一口も早く実現するということを望んでいる。まさに、国家の主権にかかわる重大な課題と言える。

日本の「固有の領土」という主張に対し、ロシアは、もともとアイヌなどの少数民族が居住していた地域を日本、ロシア双方が制圧したもので、「固有の領土」という表現は当てはまらないし、国際政治の上では「固有の領土」という観念は無いと主張している。また、一度も他国の領土になったことのない土地が他国に編入されるのは歴史的にはそう珍しい事ではない、として、あくまで北方領土は日本のものではないという考えをみせている。最近ではメドベージェフ大統領が北方領土を訪れロシアの領土であるかのように当たり前前のようにしているのをテレビや新聞を通して見た。

私は北方領土問題を調べていくうちに、北方領土について関心をもつようになった。もともと北方領土に住んでいた日本人の身になってみるとその気持ちがよく分かった。なにも悪いことをしていないのになぜ故郷を離れなければ

ならないのか？早く北方領土を返還してほしい、疑問や希望がたくさんあると思う。このままずっと占拠されたままだと、返還される前に亡くなつていく人も出てくるだろう。そうなれば、故郷に帰れないまま死んでいく悔いが残る人生になってしまうかもしれない。だからこそ、我々、日本国民が一つになつてそういう人たちを助けていかなければならないのではないだろうか。

二月七日。この日が日本の未来を変える日だと信じている。

私たちができること

黒部市立宇奈月中学校 三年 佐賀 美紀

私の学校では、北方領土について学習をしてきました。はじめは、全然北方領土について知りませんでした。学習の仕方と習しているうちに興味がわいていきました。学習の仕方としては、総合の時間に、ビデオや写真、資料を見て、国語の時間に、パネルディスカッションを通して、そして北方領土講演会で、元島民や島民二世の方にお話を聞いて学習

しました。

総合の時間には、北方領土についての基礎知識を学びました。北方領土とは、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四つの島からなります。北方領土全体では、私の住んでいる富山県より大きくなるそうです。北方領土は、暖流と寒流のいり混じるところで、新鮮な魚がたくさんとれ、漁業がとても盛んです。そして、一番関心を持ったのが、北海道につづき、富山県が引揚者数が多いということです。私の住んでいる富山県が多いというのには驚きました。このことから少しずつ北方領土について興味をもちはじめました。

次に、国語の時間に、日本、ロシア、諸外国の三つの立場に分かれてパネルディスカッションをしました。私は、諸外国という立場で参加しました。北方領土について本やインターネットを使い、自分たちで調べるといい機会となりました。このパネルディスカッションを通して、一段と北方領土について考えることができよかったです。

最後に、北方領土学習講演会では、元島民、島民二世の方の生の声をお聞きすることができました。これまで学習してきたのは、あまり島民の方の生活にふれていなかったのですが、生の声をお聞きし、新しい発見をすることがで

きました。この講演会の時から、元島民の方や、その家族のみなさんの助けになれるために、私たちには何ができるかと考えました。お話の中では、北方領土についての正しい知識をたくさんの人たちに伝えてほしい、署名活動などの返還運動の活動に参加してほしい、そして一番大切なのは、中学生という立場としての意見を出してほしいと言われました。返還運動への参加というのは、少し難しいかなと思います。でも、北方領土についての正しい知識を伝えていくこと、中学生としての意見を出していくことは、私たちにもできると思います。みなさんから聞いたお話を参考に、活動していきたいです。

私たちにできることは、数少なく、小さなことばかりのはずです。でも、この小さなことをたくさんすれば大きくなります。私たちの力が大きくなるころには、今よりもっとたくさんの方が北方領土について考えるようになっていけば嬉しいです。これからは、これを目指し、身近にある小さなことから少しずつやっていきたいと思えます。北方領土問題が解決する日まで続けていきます。北方領土問題が解決することを願って…。

元島民の方々のお話を聞いて

黒部市立宇奈月中学校 三年 長谷川宇蘭

私は、総合の時間を通して、北方領土について学習しました。私は、北方領土という言葉は知っていましたがそのことについてはよく知りませんでした。

北方領土は、日本の領土なのに、ロシア人が住んでいます。それは、日本の人がロシアにゆずったのではなくて、奪われたということを学びました。一九四五年から六六年間もこの状態が続いています。

私は、北方領土について、元島民の方々のお話を聞きました。お話の中に、「ふるさと」という言葉がありました。私は、北方領土で育っていないし、行ったこともありません。だからあまりピンときませんでした。そこでもし私が元島民の方々の立場だったらどう思うか、考えてみました。私の住んでいる宇奈月は、私にとって、とても大切な「ふるさと」です。私の住んでいるところが、誰かに奪われたとしたら、とても悲しいです。そんな思いをしていたと思うと、返してほしいと思いました。しかし、ロシアの立場

になつてみると、今住んでいるロシア人は、北方領土で生まれて、育っています。ロシア人にとっても、北方領土は「ふるさと」です。日本が北方領土を返還してもらおうと、そこに住んでいたロシア人の住む場所が、「ふるさと」が、日本に奪われることになるのです。

私は、日本人とロシア人が、北方領土に共存できればいいと思いました。しかし、元島民の方々は、難しいと言っておられました。なぜなら、ロシアと日本では、違うことが多すぎるからです。政治、言語、文化などたくさんあります。一緒に住むためには、お互いが納得のいく結論を出さなければいけません。

私たちは、元島民の方々に私たちにできることは何か聞きました。すると、北方領土問題に参加してほしいとおっしゃっていました。私たち、若い人の力が必要なんだそうです。私は、問題に参加しても、自分に何ができるかわかりません。私が問題についてもっと学んで、たくさんの人に現実を知ってもらえるように、私をもっと問題について理解することが、とても小さなことだけれど、そういうことこの積み重ねが、元島民の方々にとっては嬉しいことなのかと思います。

私は北方領土について、分からないことが多かったけれ

ど、今回、元島民の方々のお話を聞いて、北方領土について学べたし、元島民の方々の思いを知ることができたのでよかったです。

私が北方領土について学んだことを、現実をたくさんの人に知ってもらって、北方領土がどうあるべきなのかみんなで考え、日本の問題として解決する道をつくる手伝いができるように頑張りたいです。

北方領土 元島民の ふるさとです。

故郷への想い

黒部市立鷹施中学校 三年 横山さくら

「北方領土。」戦後六十六年過ぎた今も解決されない日本の大きな問題。

終戦当時、ソ連による「北方領土」の不法占拠によって、生活の場をやむなく追われた北方四島の人々。今でも、ロシアによる不法占拠は続いている。追われた島民の人々は、北海道や富山県の生地に多く移住したそうだ。むりやり故

郷を追い出されて、人との交わりも、住み慣れた家も一瞬にしてうばわれるのである。黒部市の住民として、このけっして他人事とは思えない北方領土問題は、今も解決していない。

島民だった皆さんは、今何を思っているのだろうか。あまり、大きな問題とされていない、ロシアによる北方領土の不法占拠。一体、いつになれば解決できるのだろうか。疑問がつのる一方である。

私は、自分に置き換えて考えてみることにした。この黒部市を、どこから来たのかも分からない異国の人々に占拠され、身に危険を感じるような日々。たえきれなくなり、黒部市を出なくてはいけなくなる。しかし、今まで過ごしてきた家、友人、美しい故郷との別れ。そう、軽々と決められる選択ではない。それでも、やはり身を守るためには、故郷を離れるしか方法はなかったのだ。こんなにもつらく、悲しい選択を島民の人々はしてきた。

学校で行われた北方領土講座で、島民だった方々の話を聞いて、北方領土での生活がどれほど素晴らしい生活であったかという事を身に染みて実感した。豊富な海産物、その漁や収穫をする日々。一見、大変そうに感じるが、島民の人々にとっては、当たり前前で、この当たり前前の生活こそ

が何よりも幸せだったのである。こんなすばらしい生活を送っていた島民の人々。私は、てっきりロシアに対しては強い怒りを抱いているのではないかと思っていた。しかし、話を聞いているうちにそんな方ばかりではないということがわかった。「北方領土は返してほしい。けれど、また私達のような思いをする人がいてほしくないんです。」

私は、この言葉を聞いて、心が何かに締めつけられているような気持ちになった。島民の人々にとって北方領土は故郷。しかし、今住んでいるロシアの人々にとっても北方領土は故郷なのだ。故郷を追い出される苦しみを誰よりも一番、島民の人々が理解していた。「北方領土。」そこまで耳にしない、たくさんのことが隠れている大きな問題。この問題を前に進めていくのは、これからの私たちなのだ。

私たちと北方領土

黒部市立高志野中学校 三年 米田 紘子

「北方領土」という言葉を聞いて、私が初めに思うことは、「日本の領土であって日本ではない。」ということでは、

す。

私の住む黒部市は、北海道の根室市と姉妹都市の関係にあります。それは、昔北方領土に住んでいた人が、根室市と黒部市にたくさんいるからだそうです。そのため、私の住んでいる街の至る所で「北方領土返還」と書かれた看板が見られます。そのような環境の中で育ってきた私には、自然と北方領土への関心がありました。

私が中学三年になり、総合的な学習の時間に北方領土のことを調べることになりました。インターネット等で調べているうちに不思議に思うことはたくさんありましたが、一番疑問に思ったのは、北方領土問題は六十年以上も前からあったのに今もまだ何の進展もないということです。この六十六年という長い間に、昔北方領土に住んでいた方々は自分が生まれ育った思い出の場所へ帰ることができずに悲しい思いをたくさんされたことと思います。

以前私の中学校へ北方領土の元島民や二世の方々に来てくださり、北方領土についてのたくさんのお話をしてくださりました。実際に北方領土へ行き、現地のロシア人と話をされた二世の方もおられました。「北方領土が日本に返還されたらどうするか」とロシア人に尋ねたところ、若いロシア人は「出て行く」と答えたそうですが、長い間北方

領土で暮らす年配のロシア人は「北方領土に残る」と言っていたそうです。その話を聞いた時、私は北方領土が日本に返還されたとしても、慣れ親しんだ故郷を失い、悲しい思いをするロシア人が大勢出るのだという悲しみの連鎖があることに気づきました。両国の意見が一致し打ち解けあうのはとても難しいことなのだと思います。

また、北方領土の元島民の方は、日本国民の北方領土問題への意識の低さについて、

「長い年月が経てば当時の苦しみ、悲しみが忘れ去られていくのは仕方のないことだ」と言われました。ですが、私は日本とロシアが互いの意見を認め合い、打ち解けあう日まで日本国民として、この悲しみは忘れてはいけないうし、このような悲しみを生み出したロシアの人にも知ってもらいたいです。

「北方領土返還」それは言葉で言うのは簡単なことです。が、現実にするのは難しいことなのです。しかし、日本が一丸となり願い続ければ、いつかはかなう時がくると信じています。

北方領土

黒部市立桜井中学校 三年 河路 咲希

戦後六十六年。私達の身近な場所ではもちろんのこと、日本全国でも、戦争の面影を残す場所は、少なくなりました。今の日本は平和そのもののように思え、そして、外国とも、仲良くやっていると見えます。

九月中旬、私は北方領土についての映像を見たり、実際に北方領土に住んでいた方に、北方領土について、話をさせていただきました。コンブやさけ、タラ、ホタテなどの数え切れないほどの種類の魚貝類がとれる、すばらしい海に囲まれた島だったそうです。島民の方は、そんな美しいふるさとに帰りたいと強く願っておられました。

しかし、なぜ、戦争から六十五年もたった今もお、日本に返還されないのでしょうか。一九四五年、ソ連は当時まだ有効だった日ソ中立条約を一方的に破棄して対日参戦したそうです。そして、終戦後に千島列島への攻撃を開始したそうです。戦争直後のやけ野原の日本。そして、中立条約があったにもかかわらず攻撃してきたロシア。私はこ

の事実を知った時、ロシアに良いイメージを持つことができませんでした。そしてロシアによる占拠が不当行為であることは、明らかです。しかし、ロシアにも戦争を長びかせないために、アメリカに上陸を許されたという理由があるのです。そして、ロシアからすれば、その戦利品を受けとるのは当然だという考えがあることも事実なのです。

現在、日本とロシアとの間では北方領土問題を解決するため、外交交渉が続いています。しかし、その一方で日ロ間のビザなし訪問、現島民との対話集会など、お互いの理解を深めるために、さかんに交流が行われています。日本からも、ふるさともう一度住みたいと多くの人がこの交流に参加されたそうです。しかし、北方領土は今では、日本人だけでなく、今、北方領土に住んでいる人々のふるさとにもなりつつあります。もはや北方領土は日本だけのものではないのかもしれない。生きていくうちに北方領土に帰りたいという元島民の方々の思い。そして、これからこのふるさとに住み続けたいと願うロシアの人々。この2つの願いをかなえる道はないのでしょうか。日本人とロシア人がいっしょに北方領土に住むことはできないのでしょうか。

私はビデオで見たロシアの人々の言葉が忘れられませ

ん。

「あたたかく受け入れるが、島は返さない。」

この言葉が

「ふるさとを、共に、よりよくしていこう。」

に変わったら、どんなにすてきなことでしょうか。

北方領土は故郷

黒部市立桜井中学校 三年 堀川 桃子

私は、北方領土についていろいろなビデオを見て、今、北方領土に住んでいる人々は、どんな生活をしているのだろうという疑問を持った。昔の生活は、ビデオや、元島民の方のお話で、詳しく知ることができた。しかし、今現在、島に住んでいる人々のことは、あまり知ることはできなかった。北方領土は日本のもので、それを占領しているロシアは良くないと思うが、今、島に住んでいる人は何も悪くない。今、島に住んでいる人は、そこで生まれ育ったのだ。しかし、その生活はあまり良いものではないようだと思った。

今の日本は、道路はきれいに整備されており、電気が不足することはなく、医療機関も充実している。しかし、北方領土では、道路はあまり整備されておらず、燃料の不足などによつて停電も多く、医療機関では、医療器具、薬品が不足している。

このように、今、島に住んでいる人々は、とても苦しい生活をしている。では、なぜ、このような苦しい生活をしてまでも、島に住んでいるのか。それは、北方領土を故郷だと思つているからではないだろうか。元島民の方が、島は故郷だと思つるように、今住んでいる人々も島は故郷だと思つているのだ。

私は、今の島民の生活を調べて、ただ、島を返せと言つてはいけなさと感じた。今の島民のその後の生活についても、しっかり考えていかなければいけないと思う。まだ、北方領土問題が進展していない中でこのようなことを考えるのは早すぎるのかもしれない。しかし、いずれ、必ず考えなければならぬときが来ると思う。昔、日本人が追い出されたように、ロシア人も追い出すことになつては、やられたことは、やり返すということになつてしまふのではないだろうか。そうなれば、日本とロシアの関係はますます悪くなるばかりだと思ふ。日本とロシアが互いに歩み

より、北方領土問題解決に向けて努力していけば、いつか必ず、この問題は解決するはずだ。今、私たちにできることは、北方領土についてもっとよく知ることだ。私たちが何も知らなければ、この問題は忘れさらられ、北方領土はロシアのものとなつてしまふだろう。

私は、これからもっと北方領土のことを知っていきたいと思う。そして、いつかもっと住みやすく、日本人とロシア人とが仲良くしていけるように何か協力をしたと思う。

北方領土はなぜ返還されないのか

魚津市立西部中学校 一年 芦崎 美友

北方領土はなぜ返還されないのでしょうか。私は教科書や授業で見聞きしている限り、日本の主張は正しいと感じています。そこで、インターネットで調べてみることにしました。

はじめに、日本の主張です。日本側は、江戸時代から日本の領土だと主張しています。第二次世界大戦後、ポツダ

ム宣言で日本はソ連に樺太と千島列島を返還しました。そのさいにもともと日本の領土だった、現北方領土も占領されてしまったというのが日本の主張です。

では、ロシアの主張です。ここで、日本の主張との食い違いが生じます。なんと、ロシアも、北方領土はロシア固有の領土だと主張しているのです。この事実は、今回はじめて知りました。

しかし、北方領土に住んでいたという日本人は、たくさんいらつしやるのです。現に私の住む富山県には、六百二十六人も人がいるのです。

ここまでで分かったことで私はやはり、日本の主張は正しいと思います。では、なぜ返還されないのか、という考えにまたたどりついてしまいます。

調べているうちに、実は日本のせいではないかという考え方を見つけました。

親日派のプーチン首相は、三年ぶりに来日した時、日本側の代表は「三・五島の返還でもいいのでは」（まとめたニュースより）と発言しました。しかし政府内では、四島すべての返還を要求する政治家や二島の返還を要求する政治家などばらばらだったそうです。ロシア側からすれば日本の要求にどう応えていいか分からないといった状態だと

いうことです。日本にも悪い所があるということが分かりました。

返還されない理由は多く、複雑なことが良く分かりました。まず、日口の主張の食い違い。次に、日本政府のばらばらなまとまりのない意見。この二つが解決されることで、北方領土問題がうまくいくのだと思いました。

そして、私たち未来を創る人間が北方領土をかえしてほしいという願いや想いを忘れないでおくことが一番大切なのだと思いました。

私たちの身近にある北方領土

富山市立西部中学校 二年 林 優月

北方領土は、歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の四つの島々からなっていて、面積は五〇三六平方キロメートルです。北方領土の島々にはキタキツネ、オットセイなど、たくさん動物たちが住んでいます。とくに、国後島、択捉島は森林資源に恵まれていて、ヒグマも住んでいます。また、北方領土周辺の海は、暖流の日本海流と寒流の千島

海流が交わっていて、世界でも豊かな漁場の一つで、サケやマス、コンブなど水産資源の宝庫です。

一八五五年「日魯通好条約」には択捉、国後、色丹、齒舞の四島は日本の領土であることがこの条約によってロシアとの間で確定しています。つまり北方領土は、ロシアの領土ではなく、日本の領土です。しかし、第二次世界大戦末期の一九四五年、八月九日にソ連は、当時まだ有効だった「日ソ中立条約」を一方的に破棄し、八月二十八日に択捉島に上陸、次いで色丹島、国後島、齒舞群島とこれら四島を占領しました。その後、これら四島はソ連、次いでロシアの不法占拠の下に置かれた状態が続いています。

わたしは、北方領土問題の解決に近づけていくために、まず日本、ロシア両国民一人ひとりが日本の固有の領土である北方領土についての正しい理解と認識を深め合うことが大切だと思います。平成三年四月にソ連側から両国の相互理解を深めることを目的に、「日本国民と北方四島在住のソ連人との交流の拡大および日本国民による北方四島へのパスポート・査証なしの訪問」が提案され、平成四年から交流が開始されました。平成二十二年までの十九年間で、日本国民と北方四島在住ロシア人との間で着実に相互理解が進み、友好が深まるなどの成果ができました。でも、北方領

土問題の解決にはまだまだ遠いことだと思います。だから、ロシアとの外交交渉を粘り強く継続すれば、いつの日か北方領土問題を解決できるのではないのでしょうか。

交渉をするのは、政府です。しかし、その交渉を支えるのは日本国民である私たち一人ひとりです。北方領土問題のことを、「難しい」、「関係ない」と思っている人もいます。でも、日本中が団結してこそ、その声が政府に届き、交渉の支えになり、北方領土は日本に返ってくると思います。だから、少しでも日本とロシアの間でおこっている、北方領土問題について知り、北方領土問題は、私たちの身近にあるということを感じてほしいと思います。

北方領土返還を求めて

射水市立大門中学校 三年 田中 信也

ベネズエラには、アベス島という領地がある。無論、ベネズエラの軍事下に置かれているのだが、隣国のドミニカ国も領有権を主張している。両国の関係は改善されることなく今日に至っている。いわゆる領土問題が発生している

のだ。我が国、日本にある北方領土も例外ではない。

北方領土、すなわち択捉・国後・色丹・歯舞の四島は、本来日本固有の領土だった。約三九〇年前には、その存在が認識されており、また、当時のソ連の探險隊が作成した地図には北方の島々が日本の領土であると明記されている。このことから、北方領土は当然日本の領土ということになる。

だが、事態は一変する。第二次世界大戦末期、ソ連は当時まだ有効だった日ソ中立条約を一方的に破棄し、対日参戦する。そして、終戦後、択捉島以南にアメリカ軍が進駐していないことを知り、千島列島のみならず北方領土をも占領した。それが現在にまで至っているのである。

現状を把握した僕は、自分にも何かできることがあればと思うようになった。そこで、去年に行われた、北方領土を考える東海・北陸中学生のつどいに参加することを決めた。

七月三十日、東海・北陸各地の中学校からさまざまな考えを持った生徒達が集まってきている。活動の一環としてあるビデオを観賞した。それは、占領された島々の様子や元島民の方の思いが記録されたものだった。島は当時の面影を残したままで、道路も舗装されていない。元島民の方

は、「島に生まれたことを誇りに思う。」や「できることなら島に帰りたい。」などと島を思う気持ちがとても強い。だからと言って、北方領土からロシア人を追放してしまうと、今度は日本の不法占拠となってしまう。ただ一つ言えることは、北方領土は元島民の故郷であり、現在島に住んでいるロシア人の故郷でもあるということなのだ。

領土問題は、時に戦争の火種となる。最悪の事態から逃れるためにも、両国が互いに協力し、共存することが解決への道に繋がると思う。しかし、中途半端な共存では意味がない。両者が、人種を問うことなく、平和にそして、自然に暮らしていけるようにするのが理想だろう。実現までには、膨大な時間と努力が必要だが、実現すれば両国の良い交流の場になると思うのである。

北方領土問題を考えていく中で、多くのことに気付かされた。この先、日露間の関係をどのようにしていくかが大切だと思う。だが、ロシアが日本にしたことは決して忘れてはいけない。当時の出来事を知る方も随分減ってきている。次の世代へ語り継ぐことも大切な解決への一つの鍵だ。北方領土を両国の良き故郷として、また、良き交流の場として発展することを願いたい。

日本とロシアとの問題 北方領土

射水市立新湊南部中学校 一年 増谷 茉由

「北方四島」日本人がたくさん住んでいた島。突然、ロシアに占拠されて今も返還要求が続いている島。たまに、テレビのニュースで北方領土問題が流れていても

「あつ、ここ地理でやったな。」

と、思うだけでとくに興味をもちませんでした。でも、そんな私に父はこう言いました。

「例えば、自分が住んでいるこの富山県がいきなり他国に占領されて、しかも好き放題されたらどうだ。北方領土に住んでいた人々はとてもつらい思いをしたんだぞ。」と、私に言いました。確かに、自分の立場に置きかえたら悲しいし、腹立たしく思います。それを実際に北方領土に住んでいた人々が経験されたのだと思うと、さすがに胸が痛くなりました。

北方領土に興味をもった私は、詳しく調べてみることにしました。調べてみると、今まで知らなかった住民の方々の生活実態が分かりました。中でも、北方領土の住民には

富山県の黒部市の方々が多かったということを知り、富山県民として驚きました。さらに、ロシアの傍若無人ぶりにも驚き、ショックを受けました。ある時は勝手に人の家に入り込み、そしてある時は日本人が見たこともない大きな銃を振り回したり、と考えただけでも恐ろしいことをしたことは許せません。このように、私は少しだけでも北方領土問題について知識を得ることができました。この少しの知識で、私の気持ちは大きく変わりました。それは、早く解決してほしいという強い気持ちが生まれたことです。島に住んでいた方々の思いを考えると、本当に早く解決して、生まれ故郷の地に戻れたらうれしだろうなと思います。

ただ、この北方領土問題は、慎重に話し合い、お互いが理解し合う必要のある問題だと思えます。ロシアから日本が強引に領土を奪い取ったなら、それはロシアのしたこと何ら変わりはないことになるからです。さらに、なかなか解決しない理由のひとつに、ころころ移り変わる日本の政治にも原因があるのではないかと考えます。

歴史上、一度たりとも他国の領土となったことのない、つまり、日本固有の北方領土。ロシアと日本両国が、十分話し合い、平和的な解決をしていただきたいと思えます。

そして、一刻も早く、北方領土に笑顔あふれる平和な日々が訪れることを願います。そのためにも、私自身もずっと北方領土に関心をもち、積極的にかかわっていくことも必要だと考えさせられました。

「故郷へ帰るために」

砺波市立庄西中学校 三年 埴山 弥京

「北方領土」という言葉を聞いていきたい、どれだけの人が深刻に考えるのでしょうか。実際に私は、あまり深く考えないうちの一人でした。時々、テレビなどで耳にするこの「北方領土」について先日、クラスで授業がありました。第二次世界大戦後、ソ連軍が北方四島に侵略し、日本人島民を強制的に追い出し、さらには北方四島を一方的にソ連領に編入するなどし、ソ連が崩壊してロシアとなった現在もなお、占拠し続けているそうです。

これについて私は難しい問題だなと、率直に思いました。日本なのに日本じゃないというあまりにも長すぎる時間に悲しいとさえ思います。でも、私がそれ以上に深く考えさ

せられたのは、戦前まで北方四島に住んでいた島の人々のことです。無理やり島から追い出されて、どうなるか分からないまま故郷を去ることになったのです。漁業が盛んで少ない島民だったからこそ、地域愛も深かったと思います。島に慣れ親しんだお年寄りからこれからの島を担おうとしていた子供達までもが占拠しようとする旧ソ連軍に従わなければならなかったのです。それから六十年以上経ち、一度も島へ帰ることのできないまま、ロシアに恨みを残し亡くなった方々も多くおられたと思います。

この思いは今回の東日本大震災も同じだと思います。東北の方々が放射能によって慣れ親しんだ土地からはなれざるをえなくなってしまう。戦争も原子力も人間の手によって生まれたものであり、後々人々にふりかかるという悲劇の象徴だと思います。

長い年月がたった今でもきえないこの問題について私達は真剣に考え、「元島民」が「現島民」になるように訴え続けなければいけないと思います。北方四島の色丹島、国後島、択捉島、歯舞群島が戦前までの活気ある島々になるために、一日でも早く故郷へ帰りたいと願う島民の人々のために。

